

# 俳人協会 新潟県支部報

No. 89  
令和4年9月15日

## 第32回「花と緑」

### 新潟県俳句大会記

関矢紀静

晴天に恵まれた7月31日(日)新潟市「朱鷺メッセ」にて第32回「花と緑」新潟県俳句大会が開催された。

ようやくコロナの感染者数も減り、落ち着いた様に思っただが、新種の変異株がみつかり、第七波の感染拡大という事態になってしまった。

参加者は62名と昨年よりさらに少なかったが、大会実行委員のみな様や、支部の会員のおかげで、少人数ながら有意義な会となった。

当日の受付は午前9時開始、当日句は雑詠2句で10時30分締切。10時40分より熊谷國男

幹事長の発声にて開始。

山口啓介支部長の挨拶では大変な時世に、大会を開けることの感謝と参加された会員を労られ、当日の講師、佐怒賀直美俳人協会理事の紹介をされた。

佐怒賀直美先生の講演は、「松本旭と佐渡」と題され、師である松本旭と本県佐渡との若い頃から晩年に到るまでの深い縁を話された。

また師の各句集より、佐渡にまつわる句を取り上げ、句のひとつひとつについて、詳しい鑑賞をされた。

師の見たであろう佐渡の風

景や、動植物・人の暮らし、四季の移ろいについて熱く語られた。

そして師の人となりについては、晩年まで元気に過ごされ、自分の手助けすることはあまりなかったとのこと。性格はとても几帳面で、吟行の日時や行程、同行者、また歩いた場所や句の背景にわたり、詳しく日記の形で残してくれて、後に研究する弟子にとり、

ありがたい資料になったことを、師への感謝とともに述べられた。

実際の日記の内容は講演資料の中にあり、同行者と佐渡へ渡り、バスで海岸沿いを走ったこと、農夫と牛の様子や島の生活の厳しさを感じられたことなどが、記されている。この旅では、大須賀乙字の「二句一章」のよさを会得したという。



また別の日は

越後村松町を訪ね、大きな農家で大藁束を見て「雪来るかつやつや撓ふ藁束」の句を得ている。

流人の島でもあった佐渡では、昔、流されて来た高貴の人や、能楽師たちへも思いを馳せ、その悲痛と哀切に心を痛め「島梟今宵いく度も啼きにけり」の句を残している。

佐怒賀先生は、今後もこのすばらしい師について研究を続けた

いと結ばれた。休憩時間をはさみ、午後1時より俳句大会開始。

この日の披講は、水野宗子、籙本春美両氏により行なわれた。

募集句、当日句の講評と、表彰が始まり、佐怒賀先生より、一句ずつ大変細やかな講評をいただき、貴重な時間を過ごすことが出来た。

最後に大会実行委員長、矢澤彦太郎氏より「大変な時代であるが、この俳句大会を今後も継続したい」との誓があり、閉会となった。

(今回、懇親会は中止)

#### ◎当日作品の成績

佐怒賀直美先生選

(特選)

谷よりの風の片寄る釣忍

寺尾亜真李

(佳作)

朝曇一粒足りぬ正露丸

籙本 春美

いやひこへ道はひとすぢ青田

矢澤彦太郎

老鶯や巻機山のよく晴れて

土屋 瞳子

どの家も青田の見ゆる窓を開

佐藤 とよ

け 吊橋の真中うごかぬ黒日傘

渡辺 徳治

七月や空の終りに舟一つ

村山 椿

語り部の語尾びんと撥ね梅雨

上がる 上野 昭一

片蔭や丁字路おほき城下町

櫻井 八石

影ぎゆつと押しつぶさるる暑

さかな 櫻井 詩子

菓子缶は母の針箱夜の秋

小林 風干

蠅叩四人家族の日もありぬ

戸田 一子

ぼうふりの水面の月を見て沈

む 越野 蒼穹

夏座敷まんづ飲むべし語るべ

し 小山 洋子

ばんぽんと魔法をかくる天花

粉 伊藤一二三

茗荷摘み夫の生家を仕舞ひけ

り 遠藤 直子

田の角へ靴跡多き余り苗

齋藤 信

をちこちの地べたのほつれ蚯

蚓ゆく 長谷川みき子

赤ん坊のずしりと重し雲の峰

小林 悦子

虫干や作徳帳簿高く積み

沼尾 將之

水を撒く開演前の忍者達

横川 湯八

地元選者(特選)

。上野 昭一選

嶺雲や武将のごと見得を切る

。熊谷 國男選

人はみな影を引き連れ炎天下

。久和原 賢選

過去は過去未来は未来今は夏

。越野 蒼穹選

早星眠らぬコインランドリー

。戸田 一子選

しろがねの泥の光や古代蓮

。畠野 旬子選

享けきれぬほどの日差しに梅

干しぬ 榎木 幸子

。籙本 春美選

風鈴や亡き人のこゑ風になる

。平賀 寛子選

茗荷摘み夫の生家を仕舞ひけ

り 遠藤 直子

。水野 宗子選

白玉や夫と記憶の少しずれ

。山口あつ子選

帰省子にふるさと詰めて持た

せけり 大橋 節子

(当日合点成績)

1位・佳作8点 土屋 瞳子

2位・佳作8点 大井 則夫

3位・特選1点・佳作6点 大橋 節子

4位・佳作7点 番場勢津子

5位・佳作7点 平賀 寛子

6位・特選1点・佳作6点 山口あつ子

7位・特選1点・佳作5点 榎木 幸子

8位・佳作6点 佐藤 とよ

9位・佳作6点 櫻井 詩子

10位・佳作6点 長野 光雄

11位・特選1点・佳作4点 長谷川みき子

12位・特選1点・佳作4点 寺尾亜真李

13位・特選1点・佳作4点 遠藤 直子

14位・特選1点・佳作4点 小出 利恵

15位・佳作5点 籙本 春美

16位・佳作5点 矢澤彦太郎

17位・佳作5点 山口 啓介

18位・佳作5点 渡辺 直子

19位・佳作5点 遠藤 宣秀

20位・佳作5点 外山 令子

(次点)

佳作5点 久和原 賢

佳作5点 司 雪絵

※2句合点の順位について

①最初に、先生、地元選者の

合計得点が同点の場合。

②その次は、特選の合計点。

③特選同点の場合は、先生の

特選の有無。

④最後に、当日の受付順。

の順で決定しました。

令和四年七月三十一日

第三十二回

花と緑新潟県

俳句大会募集句

【各選者特選句】

佐怒賀直美先生選

風の茴香てふてふがぶらさが

る 土方 公二

春泥を跳んで伝言忘れけり

白井 良治

青鷺の羽音が影となる高さ

山口 啓介

井上 弘美先生選

よく噛みてゆるき粥食ふ敗戦

日 関 千年雄

夏兆す青年医師の二色ペン

渡辺 徳治

万緑の風になりたき子等のこ

ゑ 下條 春秋

上田日差し先生選

花の種ただそれだけの封書か

な 池田亜紀子

かすみ草母の記憶のあかるき

日 長谷川みき子

生き生きとわれを見てゐるア

マリリス 近藤 久光

奥名 春江先生選

夏草や人通らねば道消ゆる

村山 靖子

き 米岡 幸子

今年より母の畑継ぐ花なづな

星野 榮子

片山由美子先生選

残雪の窓をそびらに離任式

井口 光雄

ものの芽をつたはる雨のうす

みどり 岩崎 千尋

錦鯉沈みて色の浮き上る

山口 啓介

菅野 孝夫先生選

郭公やダムのさざ波ささ濁り

牧野夕美子

村雪解家軽くなるかるくなる

石田 波一

苗売に選んでもらふ瓜の苗

渡邊 幸子

小島 健先生選

村雪解家軽くなるかるくなる

石田 波一

いま羽化の蟬のたましひ濡れ

てをり 山口 啓介

その果ての戦禍も知らず鳥帰

る 坂上いさむ

しなだしん先生選

良寛の乞食の径木の根明く

声 菅沼 義忠

引き入れてしばし田水の笑ひ

声 はだれ野や鳥が跳ねては光食

む 榎木幸子

中原 道夫先生選

素潜りの手を突き上ぐる大鮑

高埜 健蔵

たんぽぽやからだはんぶんラ  
ンドセル 田辺 洋子  
夕焼やコンテナ船も溶かす海  
杉山 昌

森山 暁湖選

田植終へ寡黙な村に戻りけり  
久和原 賢

風光る故郷丸ごと包み込み  
仲田しげを

蛙鳴く闇深まれば闇の声  
関 由美子

矢澤彦太郎選

自転車を曳いて下船や島の夏  
外山 令子

夏草や人通らねば道消ゆる  
村山 靖子

いま羽化の蟬のたましひ濡れ  
てをり 山口 啓介

山口 啓介選

竹皮を脱ぐ少年の喉仏  
西村智恵子

村々に水ゆきわたり燕来る  
小黒 正

緑陰の途切れ町名変わりたる  
関 由美子

赤塚 五行選

かって戦火逃れ来し河大花火  
木曾 武子

敗者にも校歌ありけり山笑ふ  
山本つや子

その果ての戦禍も知らず鳥帰  
る 坂上いさむ

井口 光雄選

地球儀の世界は一つ聖五月

やうやくに席の空きたる花見  
茶屋 佐藤 昭子  
角突きの大きポスター夏来る  
櫻井 八石

井澤 秀峰選

清明や石工が石を佛にす  
袖山 リエ

星仰ぐ代田に映る星を踏み  
寺尾亜真李

曝す書にまじり二冊の母子手  
帳 藤沢 潮子

石黒 正勝選

弓を引くをみな顎若葉風  
袖山 リエ

草萌の大地を踏みて足場組む  
小池 旦子

いま羽化の蟬のたましひ濡れ  
てをり 山口 啓介

川崎 陽子選

母小さし影なほ小さし麦の秋  
高埜 健蔵

百枚が一枚となる青田かな  
佐藤さき子

空蟬のごとくベンチに老ひと  
り 風間 燈華

関 千年雄選

雪形の瘦せて駿馬となりけり  
羽賀 則子

葉枝や残さるとは生きるこ  
と 林 照江

製繩機から踏んで待つ雪  
解 鳥羽サチイ

寺尾亜真李選

直角に曲る通学青田風  
小林 純子

雛の灯を消して我が灯を消し  
にけり 渡辺 徳治  
ふらここを高く漕ぐ子の反抗  
期 金子よし子

春川 暖慕選

品行方正に曲がりし胡瓜かな  
織田亮太郎

先生の資料は手書き窓若葉  
若月 柳子

エプロンの洗濯ばさみ風薫る  
本間 加津

宮 京子選

手足なき自由を得たり青大将  
宮島 敏明

燕の子翔べ青空が待つてゐる  
矢澤彦太郎

口笛を吹いて大工の涼しさよ  
石塚 吉江

宮沢 房良選

花の種ただそれだけの封書か  
池田亜紀子

わが指紋ばかりわが家の冷蔵  
庫 若月 柳子

古時計鳴れば顔だす燕の子  
辻井せい純

山之内喜七選

おとなしく悪さしてをり葱坊  
主 倉井 幸子

解くほどに母の色なる粽かな  
美濃部紘三

花人のみな上を向き和みけり  
佐藤 昭子

花冷や何度も振るジャムの蓋  
秋山 保子  
貝を焼く焰のあをき海開き  
水野 宗子

若井 新一選

妖精のらせん階段ねじり花  
寺尾ゆみ子

白骨の湯に入る老いの花浴衣  
平賀 寛子

端午の節句軍国少年たりしこ  
ろ 山口 啓介

コロッケは戦後の匂ひ昭和の  
日 井出 悦子

【高得点句】

1位 7点(内特1) 外山 令子  
自転車を曳いて下船や島の夏

2位 7点(内特1) 白井 良治  
春泥を跳んで伝言忘れけり

3位 7点 更衣今日より風を  
着て歩く 久和原 賢

4位 7点 眠るだけ眠って帰  
省をはりけり 平賀 寛子

5位 6点(内特3) 山口 啓介  
いま羽化の蟬のたましひ濡  
れてをり

6位 6点(内特2) 村山 靖子  
夏草や人通らねば道消ゆる

7位 6点(内特1) 関 美美  
清明や石工が石を佛にす

8位 6点(内特1) 袖山 リエ  
草萌の大地を踏みて足場組  
む 小池 旦子

夏兆す青年医師の二色ペン

9位 6点(内特1) 渡辺 徳治  
渡辺 徳治

10位 6点 さらといふさみしきところ  
ゴム風船 渡辺 徳治

11位 5点 笹粽こどもの使ひ  
にて届く 米山 節子

12位 5点(内特2) 池田亜紀子  
花の種ただそれだけの封書  
かな

13位 5点(内特1) 菅沼 義忠  
良寛の乞食の径木の根明く

14位 5点(内特1) 渡辺 徳治  
雛の灯を消して我が灯を消  
しにけり

15位 5点(内特1) 佐藤さき子  
百枚が一枚となる青田かな

16位 5点(内特1) 小黒 正  
村々に水ゆきわたり燕来る

17位 5点 杖一步われも一步  
や花の道 本間 悦子

18位 5点 明日は子の手土産  
となる干鰯 小出 利恵

19位 5点 吊橋に声をゆらし  
て夏帽子 関 美美

20位 4点(内特1)

- かつて戦火逃れ来し河大花 木曾 武子
- 21位 4点 (内特1) 母小さし影なほ小さし麦の 高埜 健蔵
- 秋 地球儀の世界は一つ聖五月 立石 幸子
- 22位 4点 (内特1) 先生資料は手書き窓若葉 若月 柳子
- 23位 4点 (内特1) 製繩機から踏んで待つ 鳥羽サチ
- 雪解 25位 4点 (内特1) 曝す書にまじり二冊の母子 藤沢 潮子
- 手帳 26位 4点 (内特1) 貝を焼く焔のあをき海開き 水野 宗子
- 27位 4点 (内特1) 口笛を吹いて大工の涼しさ 石塚 吉江
- よ 28位 4点 (内特1) 蛙鳴く闇深まれば闇の声 関 由美子
- 29位 4点 朝桜豆腐屋の湯氣 木曾 武子
- 豊かなり 30位 4点 夕鐘や大きな耳の 木曾 武子
- 水芭蕉 31位 4点 水飲んでまたメーデーの列に入る 関川 芳弘
- 32位 4点 大川の光あまねし 小池 旦子
- 袋掛 33位 4点 青空をてんこ盛りして田水張る 立石 幸子
- 34位 4点 目貼り剥ぐ越後の空の青さかな 熊谷 國男
- 35位 4点 風に乗り風に抗ふ糸とんぼ 熊谷 國男
- 36位 4点 行く春を採血室に呼ばれけり 山口あつ子
- 37位 4点 椿落つ一輪挿しの高さから 絹沢 裕子
- 38位 4点 笛方に少女もをりぬ村祭 佐藤 とよ
- 39位 4点 鼻柱つよき会津の 匝鮎 澤井 義司
- 40位 4点 この村の名字は二つ桐の花 若月 里の
- 41位 4点 玉葱や納屋にあまたの太き釘 柁木 幸子
- 42位 4点 半分は野に返す畝 遠郭公 長谷川みき子
- 33位 4点 青空をてんこ盛りして田水張る 立石 幸子
- 34位 4点 目貼り剥ぐ越後の空の青さかな 熊谷 國男
- 35位 4点 風に乗り風に抗ふ糸とんぼ 熊谷 國男
- 36位 4点 行く春を採血室に呼ばれけり 山口あつ子
- 37位 4点 椿落つ一輪挿しの高さから 絹沢 裕子
- 38位 4点 笛方に少女もをりぬ村祭 佐藤 とよ
- 39位 4点 鼻柱つよき会津の 匝鮎 澤井 義司
- 40位 4点 この村の名字は二つ桐の花 若月 里の
- 41位 4点 玉葱や納屋にあまたの太き釘 柁木 幸子
- 42位 4点 半分は野に返す畝 遠郭公 長谷川みき子

4点句迄を入賞としました。同点句の順位は特選句を上位とし、なお同率の場合は受付順としました。

### 私の吟行地

港町松浜

倉井 幸子

新潟市の中心部から北へ十三キロ、阿賀野川の河口に位置する人口一万三百の港町が私の住む松浜の町である。

地元の幼稚園の募集案内にある通り、海あり河あり、船あり飛行機ありで漁港からはたくさんの船が行き交い、対岸の新潟空港から発着する飛行機は町の真上を低空すれすれに飛んでいる。

伝統ある夏まつりの山車は近隣の人達で大賑わい、特に「ござれや花火」は見物人が二十万人とも言われ観光バスが列を連ねる。

句材には事欠かないが特に私の好きな風景は、かもめの群れ飛ぶ船溜りの四季の風情、秋口の鮭漁の頃、網を張った川面を船の行き交う夕暮れの景色は、墨絵を見るような美しさである。

そして阿賀野川の堤防からみる見事な落日——。大きな盪ほどの夕陽が真赤に燃えながら沈んでゆく。

幸子

高田城址公園

山岸 幸子

江戸時代「この下に高田あり」と言われた雪深い当地。令和の時代になっても雪には苦勞しています。

雁木の長い家並を抜けると桜の名所として名高い高田城址公園に出ます。四千本とも言われる桜とお濠の水面に映る残雪の妙高山の競演は、長い冬の終わりを告げる自慢の美しい景色で、全国各地からお迎えしたお客様も大満足でお帰り頂いています。

城を守る高い石垣はありませんが、幅の広い濠が廻らされ満々と水を湛えています。夏には「東洋一」と言われる蓮の花が咲き誇り広い外濠を埋め尽くします。蓮は開く時にポンと音がするとの俗説があります。今年こそは早起きをして検証してみたいと思います。

ベンチに座っているだけで季節の移ろい、生命の営みを感じることの出来る句材豊かな高田城址公園は、私の大事な吟行地です。

幸子

### 季語におもう

土屋 瞳子

私はどちらかというと、吟行句が苦手である。しかし吟行地に行くとその地がすべて季語にあふれている。その中に身を置き脳裏を駆け巡る。自宅ではリビングのテーブルが私の居場所である。「季語」には、日本文化のエッセンスが詰まっている。俳句が十七音で大きな世界を詠むことができるのは、背景にある日本文化全般が季語という装置によって、呼び起こされていくからと、『角川俳句歳時記』の序に示してある。作句の上で大切なことは季語の把握や表現方法だと思ふ。季語の捉え方、季語が役割を果たしているか、句会では先生の選評を聞き、それらを栄養として学んでいる。オリジナルのある表現で作句したつもりが、「類想類句」ありという事もある。日常の会話の様な言葉使いをしたい。あえて難しい言葉、理解に苦しむ様な表現はさけない。季語の説明はしないこと。たとえば「落花」

という季語で「落花が地を走る」の「地を走る」が不用。季語はそれだけのことを包括する。私の生活の中での実作は、眼前の景や物に出会い、心が動いて自から季語が定まってくる。

「スケート」「ラグビー」

は、山口誓子などが新季語を定着させ得たのは連作という形式を通して、みずからの蓄積を創出したからと聞いた事がある。『東京ヘップバーン』の黛まどかの句会では「ボジョレヌーボー」「サザンオールスターズ」などが季語としての句が出たようですが、一般性を得るに至っていない。歳時記にある季語は消える事はないが「髪洗ふ」「シャワー」「ハンカチーフ」「冷蔵庫」などは時代の変化で季語としては薄れて来ている。近年のコ罗纳禍で「マスク」も同上である。また環境に関する条例で「落葉焚き」が平成十三年四月から原則として禁止された。

橙色に照らされる人の顔、落葉の燃えるにおい。焚火には人を癒す独特の魅力があり、生活に浸透し、日本文化の一つと言って良い存在だった。昭和、平成、令和と生きていく。今後どんな新しい季語が定着するのだろうか。

### 季語におもう

平賀寛子

当時、我家の周りには青田が広がっていた。

田植の頃になると、家の南側の道路の縁に腰掛けて、毎日田をながめている老人がいた。昼食時に家に帰ると、我家の北側に田のある女性がやって来て水路の板を外す。すると老人が戻って来て、外された板で再び塞ぐ。二人がこの行為を繰り返していることに私はずっと不思議だった。

俳句を始めたのがきっかけで、この疑問が解決されたのは、二十年後のことである。中央の俳人が講演の中で、歳時記にある季語「水番」、傍題の（堰守・夜水番・水盗む・水守る・水番小屋）は、今では死語になったと話された……とか。講演をその場で聞き、とても腹立たしい思いをしたという人が、句会で話された。後日、農作業の様子を子細に記して手紙を出すと、講演者からあやまりの返事が郵送されてきたそうだ。田圃の水を取りごっこして

いた二人。女性は結局ながい間、御主人亡きあと守ってきた稲作をやめてしまった。その時、私に話されたことが、「自分の家の田には水がこない。女だからどうしようもない。」だった。やはり、「水番」は重い重い意味を持ち、実在する季語だったのだ。同じ結社である仲間の作品を二句。

《起き抜けにバイクで廻り水盗む》

《酒臭き男の走る夜水番》  
近年、田が住宅地になり、自然環境の変化は大きい。高齢化により後継者がいなくなつた。いたとしても、農業から離れてしまう現実。急速に変化する農業ではあるが、畦塗り・田打・代掻・代田・苗代・苗取・田植等、春から初夏にかけて、農作業にかかわる季語は多くある。しかし、これも死後と化しつつあることを考えると、四季の季語が満載されている農業が衰退していくことは淋しいことでもある。

農作業に係る句を残すことは、俳句の重要な使命となる。越後を代表する美しい田園風景。この風景を俳句に託すことは、この地の風土を守ってきた農の姿を後の人達に伝える証となりうる。

### 季語におもう

長過ぎる季語

越野蒼穹

新季語について最近気になったことがあります。有季定型を俳句の約束事とする集団内では、原則は五七五の十七音の最短詩を詠もうとしています。しかるに十数音を季語だけで占めたら、作者のオリジナリティはわずかな音しかありません。これではよいのだろうかという疑問です。

角川から新版の大歳時記が十五年ぶりの改定出版の途中であり、七月現在で春と夏の巻が刊行されています。

新たに採用された季語で問題なのが、行事の項に掲載の「東日本大震災の日」です。なお傍題は「東日本大震災忌」と「三月十一日」です。いずれも音数はそれぞれ十四、十三、十です。この新季語としての採用にあたっては、編者の高野ムツオさんらの思い入れがありましよう。最近の大きな社会事象であり、その歴史の記録をこの際大歳時記に編入しておきたい気持ちは理解できます。ただしこのまま

の形では賛同できかねる気がするのです。

実際の句作にあたっては、この季語の運用は、残りの語数の制限からは至難の技です。妥協案として、これまでは忌日の前書きなどで、他の季語で発表して来ています。「みちのくの今年の桜すべて供花」（高野ムツオ）「凡近しどれも亡骸無き葬儀」（照井翠）

なお「季語になぞなりたくなかった原発忌」（曳地トシ）というシニカルな句があります。この「原発忌」なんて、簡略さと事象の把握評価としても、新季語として定着すればと個人的には思うのです。

三陸沖で大津波が起きたのが第一で、最大惨事の原発事故はあくまで統発的のみなせば、お役所的呼称を容認するしかないのでしょうか。二〇一四年発行の分冊版「日本の歳時記（春）」（小学館）でも「東日本震災忌」として季語に採択で、同様な立場のようでした。

しかし冗長な季語は俳句の簡潔で直截な表現の原則にあくまで反しておりましよう。

旬会報

浦佐俳句会

令和4年6月25日(土)

(通信句会)

春の野へ放たれるやう退院す

関 千年雄

朝夕に河鹿声澄む襖川

森山 暁湖

母の忌や膳に好みの冷奴

伊佐 郁子

公園の上向く蛇口夏来る

ささき万稚

村へ一人男の子産れて幟立つ

関 誠

朝も居た夜もまだいる雨蛙

高橋 良一

風船を逃して空の遠くなる

井口 光雄

(報・井口光雄)

「青山」新潟加茂句会

令和4年6月14日(火)

会場・加茂市コミニティ

梅雨晴間蝉涙のある辻地蔵

田中 幸子

雲垂れて野良着しめらす走り

梅雨 広川美津子

梅雨晴れ間ピアノソナタのた

どたどし 八子 栄子

蚕豆や寝床のような殻の中

森 貞子

浜風や不意に入り来る夏燕

足立 宏子

草取りのひとり捗る日曜日

池上 久子

亡夫の机にしばし花は葉に

五十嵐久子

段畑にどよめき上がる大花火

柏森 昌

直立に咲き品格の花しようぶ

小松 スミ

新緑の山へ人影吸はれゆく

畠野 旬子

(報・畠野旬子)

「河」新潟支部句会

令和4年6月12日(日)

会場・新潟市万代市民会館

長子誕生六月の風あをし

矢澤彦太郎

木苺の記憶は母に繋かれる

春川 暖慕

藪蚊生れ英雄賛歌めく羽音

宮 京子

青梅に紅のひと刷け子の喃語

倉井 幸子

平常にもどる血圧梅雨の月

小出 利恵

しあはせと言へる幸せつつじ

燃ゆ 伊与部京香

遠き地の弾丸の音梅雨しとど

斎藤 忠吉

街なかのけやき若葉の耀へり

大井 則夫

下に乗せ身の細くなりかき水

田中いずみ

もうすでに別の気鬱よ南吹く

関矢 紀静

(報・関矢紀静)

「銀化」とねりこ句会

令和4年6月26日(日)

会場・万代市民会館

ストライク炎暑一瞬間まれる

中原 道夫

金魚藻の与り知らぬさや当て

越野 蒼穹

も 神奈川沖波裏くぐる夏暖簾

十見 達也

大花火音無き家に音の降る

山崎 未可

手の甲に少し冷たき初螢

織原 芳晴

天花粉みどり児に恥部なかり

上村一九路

けり 隠沼にささめき咲ふ花菖蒲

和栗 痴龍

梅雨曇ロックビートがギザギ

丘 のぼる

ペテン師にお休みのあるサン

水木 沙羅

グラス 数列の記憶おぼるげ蟻の道

小川 貴史

豆めしの少しゆるめに炊き上

矢尻 幸夫

アメンボの軽さ支へる水の窪

金子 富也

梅雨晴や忘れたころに竿竹屋

白川 博

網戸越し嫌な候補の演説も

横川 湯八

入舟町舟絶え人は炎暑耐ふ

寺尾亜真李

(報・寺尾亜真李)

花筒俳句会

令和4年7月1日(金)

会場・柏崎市民プラザ

禅寺の魚鼓の音こもる涼しさ

よ エアコンを効かせ極楽大昼寝

季を知りて烏柄杓の出番くる

桑原 清風

開帳へはこれで仕舞と坊泊り

近藤 美好

柿若葉風やわらかく雨となる

坂井 文繪

価値観に差のある二人夏旺ん

坂田 金二

どの窓も灯る病舎や花火の夜

高島 朝子

早発ちの朝餉に茄子の一夜漬

武本 松久

星野 祐子

良き響き窓一杯に夏鶯

食べて寝てそれなり忙し夏来

る バスツアー久し長井の花菖蒲

村田 恵

上野 昭一

(報・上野昭一)

「汀にいがた」句会

令和4年6月18日(土)

会場・上越福祉交流プラザ

通院の数増す日々や半夏生

小田ゆかり

夕端居棚田に映る星の数

風間 照子

沖繩忌基地を隣に美術館

小林 淑江

雲の峰甲子園へと子らの夢

たかだ雁木

睡蓮の真直ぐな花揺れてをり

滝沢 一成

紫の雨の雫やクレマチス

筑波 文枝

万緑やこの村に鳴く鶏一羽

古川よし秋

浦巡り好みて歩む路地薄暑

山岸 幸子

種袋の銘のよろしき豆植うる

山田 晴女

浜屋顔ビーチバレーのトス高

山本 信義

入山の禁止の札や蠅草

井澤 秀峰

(報・井澤秀峰)

# 夏の一句

芍薬や三日まじめの顔みせり

嫁いだ時からの芍薬、六十年の年月を過ぎて、  
変らぬ花弁に見とれた時の一句、柔かく、心安らぐ  
一時である。花の命は短く、三日過ぎると崩れ儚い  
命である。精一杯生きぬいた花に感謝し、私も精一  
杯生きぬくことを心に誓った。

石井玲子(蘭)

虫きらひ山もきらひと避暑に来て

子供がまだ幼かった頃の夏休み。カーブの多い山  
道で子はバスに酔ってしまい、やっと辿り着いた宿  
では灯火に集まる蛾の大群を怖がった。散々な休暇  
初日ではあったが、翌日にはけろっとして高原を走  
り回っていた。

石川 忍(春野)

モナリザの微笑みに似しアマリリス

毎年今頃になると目を楽しませてくれるアマリリ  
ス。大輪の真紅の花。玄関に置くとパッと明るく元  
気の出る花。じっと見ていたら何故かモナリザのあ  
の高貴な妖婉な雰囲気を感じて詠む。

石橋紀美子(あきつ)

白玉や母なつかしき掌

夏になると作りたくなるのが白玉のおやつ。むか  
し、母が作ってくれた白玉は砂糖蜜をかけただけの  
素朴なものだった。私が子や孫に作ってきた白玉の  
おやつは缶詰の果物など入れたりしたけれど。今、  
夫と食べる白玉は母の白玉とそう変ってはいない。

市川輝子(若葉)

篠の子飯山盛りにして里暮し

里住まいの私事であり、今年も二回採りに出掛け  
た。篠の子は皮を剥くのが大変であるが、炊き込ん  
だご飯が何よりも嬉しく、しかも胃を手術した身に  
とっては糧飯最高である。至福の一刻を味わった。

佐藤捷司(風港)

単純を尽して蛇に生れけり

我が屋敷に七尺余の青大将が生息している。春穴  
を出ると石垣の傍らで日光浴をしている。手足が無  
いので石垣の小さな隙間から自由に出入りできるの  
である。手足がなくても不自由ではない。数年前二  
匹の蛇が身を絡ませて上手に交尾をしていた。

竹田恵示(百鳥)

無に化す生はんざき一瞬の捕食

大山椒魚が巢穴から頭を出している様な水中の岩  
石。その前を魚や蛙が通ると一瞬のバクリノあの緩  
慢な動作からは想像もつかない早技。その食べ方は  
是としないが、歳も嵩んだ今無に化して生きる・も

有りかなあ、などと思ったりもしている。

十見達也(銀化)

薰風や牛の長鳴く島岬

佐渡の外海府に関岬はある。海へなだれ落ちそう  
な急勾配の牧場に牛が草を食んだり木陰に座してい  
たり。案内してくれたJ氏が声を発すると急坂をか  
け上がった牛が一頭近づいてきた。名前を呼ばれて  
飼主のもとへ来たのだと言う。別世界の体験だっ  
た。

本間エミ子(春耕)

夏雲の流るるままに子ら遊ぶ

保育園での景。明るい声が聞こえる。夏の盛りに  
子供達はのびのびと戯れる。自然界と子供達の無垢  
な心が重なり合う。

迷いも雑念もない子供達の遊戯。それが夏雲と一  
体となった。夏雲は生のエネルギーを象徴している  
ようだ。

八木年樹(無所属)

灯台へ続く小径や夏葎

数年前、佐渡北端の海の安全を守る弾崎灯台を訪  
ねた。六十年前に友達と見た灯台は新しい灯台になっ  
ていた。辺りはバンガローの建つ公園となり、前に  
立つと映画「喜びも悲しみも…」の主題歌の流れる  
碑も建っていた。でも海の青さは当時のままだった。

山本松枝(春耕)

# 秋の一句

杉叢の適う総門秋の蟬

上越支部の吟行会、主宰に来越頂きまして、春日山城址、林泉寺等々短時間ではありましたが上越の歴史に触れて頂くことが出来ました。

掲句はその時の一句です。五十代で俳句を始めましたが遅々とした歩みです。

小林 千枝(若葉)

豪農の床に名刀天高し

掲句は、重要文化財笹川邸を訪れた時の作、屋敷には、正門と裏門があり、来観者の私達は、裏門より中に入れて頂く、邸内は膨大な広さ、時間をかけての見学、屋敷の囲りには防火用の堀があり、床の間に飾られた名刀、正に、大庄屋の威風を感じる豪農である。

佐藤 文子(蘭)

汐風に佇てば旅人実玫瑰

入日に間のある刻、近くの浜辺に行く。海風に堪えて低く連なる玫瑰、その実が赫く夕日を弾く。そっと食めば、淡い優しさと共に、来し方の遙かな記憶が甦り、かの詩人が詠んだ望郷の念とも重なって懐

かしく、しばし佇むのである。

須賀 智子(隗)

今はもう使はぬ油井藪枯らし

母の生家は、昔石油王と言われた中野貫一郎の近くにあって。それも今は昔。枯渇した油井は次々に姿を消した。わずかに残った油井がまだ動いていたのである。それはまるで、昔を忍ぶ老人が秋風に吹かれて立っているかのようであった。

関 口 道代(香雨)

薄野は去り行く風の滑走路

過疎村の放棄地は御多分に洩れず蘆野、薄野と原野化している。句材を求め薄野に分け入った所、一陣の風が吹き薄の穂が一斉に靡いた。それは恰も広大な薄野を滑走路として、風の飛び去る光景に思えた。作品の巧拙は別として、気に入った一句である。

相馬 行子(遠矢)

来年は作らぬ刈田歩きけり

私共の知己の稲作農家の主。病で半身不随の身となり田作りも今年限り。覚束ない足取で刈田中を歩いている。「来年は田は作らんねえな」と呟きながら。次の年もその次の年もと判っていても田への愛着は断てないのだ。

高橋 ひろ(万象)

父と子の馬鈴薯拾ふチェコ国境

プーチンのウクライナ侵攻で、迷わずこの句にした。オーストリアの収穫祭よりチェコ国境に入った

時の農民親子の姿である。収穫後の畑で父のトラクターに男の子が芋を拾って入れている国境地帯農民。戦争の時は最も危険な目にあうのが歴史の常である。

中原 雅司(初蝶)

秋晴るる板戸外され能舞台

佐渡は能や仕舞に関心が深い。普段は閉ざされている能舞台の板戸が外されている。秋の薪能が催される為か。篝火明かりで舞う薪能は、お囃し、観客共に幽玄の世界へ引き込まれるのである。

コロナ禍も治まり、歴史ある観光佐渡に戻る日も近い。

平 岩 静(春耕)

猫に結ふしろがねの鈴今朝の秋

近所のA家の猫は私に懐いてくれ、猫好きにはこれが可愛い。昨年その日、所用で訪うと足元にすり寄って来た。見ると首に新しい銀色の鈴が付いていて初秋の清々しさを醸し出す。「お前良い鈴だねえ、風格が上ったよ」。猫との会話である。

星野 ヒロ子(風港)

助手席に菊の香乗せて帰りけり

退職後義父の遺した畑の作業を始めました。秋、菊の花を摘み家族に食べてもらおうと張りきっていました。たくさん摘んだもので菊の香りが軽トラックいっぱいになりました。その晩は家族でおいしくいただきました。

矢尾板 シノブ(あきつ)



虎蜂

赤塚 五行 (朱鷺)

神の杉仏の松や去年今年  
長辺を伝ひ歩きや春ごたつ  
ときどきは喃語も加へ百千鳥  
恋猫のなにがなんでも寝るといふ  
桜貝乙女ごころに色あれば  
その様はまさに虎蜂すずめ蜂  
既視感<sup>デジャビュ</sup>の駅やあめりかやまぼふし

若葉風

川崎 陽子 (河)

春めくや湯呑み茶碗に一茶の句  
野外劇どこに座しても若葉風  
六道の辻に吹かるる蛇の皮  
ひだまりに雀来てゐる良寛忌  
老いるとは欠けてゆくこと今日は夏至  
ステーキを焼く少女あり終戦日  
蓮の骨小さき風の渡りけり

長子誕生

矢澤彦太郎 (河)

ふたたびの病窓ぐらし花は葉に  
田植機に乗つて馬齢を輝かす  
夢の世の夢を追ひかけ籠枕  
燕の子翔べ青空が待つてゐる  
おにぎりの味噌たつぷりと麦の秋  
長子誕生六月の風青し  
水を打つ水のゆたかな国に住み

只見線

山之内喜七 (庭)

独活を堀る膝の弱さは地に託し  
こしあぶら今日の線量表示板  
夏かすみ記憶はすべて平らかに  
天空へ刻を引き上ぐ今年竹  
追伸の長くなりたる梅雨入かな  
鶏鳴の短さに梅雨深まりぬ  
万緑へもぐり込みたる只見線

私の近詠



『私の近詠』は原則として、  
アイウエオ順に掲載。(編集部)

虫の夜

井口 光雄 (春野)

草深きところで脱ぎし蛇の皮  
指先の鎌の切り傷夏終る  
帰省して祖父母の家へ二泊ほど  
コスモスの風の入りくる診療所  
二杯目の珈琲を注ぐ虫の夜  
沼一つ枯野のひかり集めたる  
搗き了へし臼のぬくもり文化の日

雪囲

森山 暁湖 (万象・風港)

世を覗く隙間を開けて雪囲  
川霧の凍てて動かぬ夜明けかな  
雪払ふ手箒置ける納所口  
寒鰭の骨までしやぶる一人の餉  
明日は雪てふ夕暮の晴れ極む  
早打ちとなりたる雪解霰かな  
写生子の画布に生まるる雪解山

青葉して

山口 啓介 (野火)

青葉して全山のち漲らす  
この山のどこか泉の湧くにほひ  
泉あり水の匂に草濡れて  
足弱の気力促すほととぎす  
折れさうなこころ噴水にて癒す  
噴水の高さ崩れて散り散りに  
疲れたる街噴水が目覚めさす

草刈

若井 新一 (春雨)

軸足を次の畦へと草刈機  
天日へ背を向け草を刈りにけり  
草刈や老いを拒める黒き髪  
夕立や驟の草の躍り出し  
荒草の影の失せたり夏旺ん  
高原の草の波濤や夏の果  
外来の草薙ぎ払ふ終戦日

# 事務局だより

幹事長 熊谷國男

◇「花と緑新潟県俳句大会」を予定通り7月31日(日)開催しました。大会直前のコロナ感染

の急拡大で開催できるかどうか、危ぶまれていましたが、大会役員と会員各位のご協力により無事に開催できました。参加者はおよそ80名の予定でしたが63名

でした。これは、当時の状況から判断してやむを得ないことでありました。参加された方々にあらためてお礼申し上げます。

なお、今回から募集句・当日句の1位から3位までに賞状を渡すことにいたしました。講師の佐怒賀直美先生の演題は「松本旭と佐渡」。流人島の歴史を持つ佐渡への俳句的興味が湧いてくる講演でした。

◇今年の当支部の主要行事の一つ俳句大会が終り、次に予定されているのは10月の吟行会です。本紙第89号に第12回新潟県「花と緑吟行会」の案内を同封しました。コロナ禍で参加人員を制限せざるを得ないのは残念な事ですが、支部会員以外の俳句愛好者を含めて、万障お帰りの合わせの上ご参加願います。何

年振りかで吟行地を新潟市の「白山公園」にしました。

## ◇支部会員の消息

(令和4年8月現在) (敬称略)

(逝去)

荻野時子 佐藤雄二

中野弥生

(退会)

大塩千代 小島露峰

山田晴女

## 俳人協会新潟県支部

### 第5回俳句大賞のお知らせ

・募集 1名3句

(雑詠、未発表のもの)

・締切 令和4年11月30日(水)

(当日消印有効)

・投句方法 応募葉書使用

(投句無料)

詳細は9月下旬、支部会員宛に往復葉書にてご案内いたします。奮ってご応募ください。

## (編集後記)

この度、支部報編集委員として発行に協力させていただくことになりました。どうぞよろしく願っています。

コロナ禍も三年目となり、なかなか収束の兆しが見えず、ウイルスと人間の知恵比べはまだまだ続くようです。若い世代、特に一〇歳以下の子どもに感染者数が増加している中、幼児までもがマスクをしている光景は何とも切なくなります。相手の表情から感情を読み取り、気持ちを理解するという発達過程に弊害が及ぶ可能性があるとする専門家もいます。成長期の子どもたちが安心して過ごせる日常生活を大人が総力戦で取り戻していかなければならないと思います。

コロナ感染症以外にも次から次へと悲しい事件や災害のニュースが流れ、翻弄させられる日々ですが、俳句大会や吟行会、句会を通じて人と交流し、俳句と向き合う時間が大切であると改めて実感しています。(籟本春美)

聖書によると、①天変地異(飢饉、地震、水害、気候変動など)、②民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる(戦争)、③死病(疫病、新型コロナウイルスなど)、いずれかで、地球はいつか絶滅すると考えられている。恐ろしい話だ。しかし、人生は、「此の世」だけでなく、「彼の世」も含めて言うから少しは救われるというもの。この地上の世界が全部ではないということだ。私たち俳人は、「此の世」だけでも、平安であることを祈るのみだ。芭蕉は、弟子から辞世の句を求められたとき、辞世は詠まない。平生の一句一句を、辞世のつもりで作っていると、言ったそう。こういう一日一日の真剣な生き方を、聖書でいう、「終末論的な生き方」と言うのだろうか。

芭蕉の有名な二句。「文月や六日も常の夜には似ず」「荒海や佐渡によこたふ天の河」。この二句は二つ並ぶことによって、はじめて一つの意味を有する。「文月や」は、牽牛と織姫の年一回の漫遊の前夜の句であるが、日常性を超えていくようなただならぬ緊張がある。それが「荒海や」で、そのことが、そのまま一気に昇りつめる。天空の二つの星さえも交会を遂げるという夜に、「天の河」という天地寂寥のきわみにあって、一人佇む。「此の世」「彼の世」の世界に歩いていくような、むきだしの芭蕉の孤独の魂がそこに感じられる。

(渡辺徳治)